

フィンランドにおける「^{サード プレイス}第三の場」(third places)としての図書館

久 野 和 子

Finnish libraries as third places

Kazuko KUNO

はじめに

1990年代まで、図書館はすぐデジタル・ライブラリーに取って代わられるという説が優勢であったが、21世紀に入ると、世界中で斬新なコンセプトをもつ大規模図書館が次々に新設され、物理的な場所としての図書館の新たな価値と機能についての評価が急激に高まりを見せ始めた。それに伴って、図書館研究も、図書館という場所の物理的な施設や空間デザインばかりではなく、さらに進んで、図書館という場・空間を機能的、心理的、社会的に捉えようとする新たな学術的試みが本格化してきている。例えば、図書館学の従来の建築論、空間デザイン論の枠組みを超えた、社会学、歴史学、地理学、文化人類学などの最先端の研究手法、研究理論を積極的に取り入れた、新たな学際的、批判的、実証的な「場としての図書館」(library as place)研究が、すでにアメリカを中心に始まっている。アメリカ図書館史研究者の川崎良孝は「場としての図書館」研究をいち早く次世代の新しい図書館研究として位置付けたが¹⁾、残念ながら、日本ではまだその認識はあまり広まっていない。

本稿では、アメリカ社会学の概念を研究の枠組みに採用した学際的、実証的な「場としての図書館」研究を試みる。本稿は5章で構成される。第1章では、日本ではまだ認知度が低い「場としての図書館」研究について端的に説明し、その重要な鍵となる「場」(place)という空間の捉え方について論じる。第2章では、図書館が「出会いの場」「交流の場」を創出、包摂することの意義について議論する。さらに、第3章で、社会的な「出会いの場」「交流の場」のモデルとして、今世界の図書館界で大きな注目を集めている社会学者レイ・オールデンバーグが提唱した「第三の場」(Third places)を紹介する。そして、第4章において、良き「第三の場」を、図書館先進国であるフィンランドの公共図書館に適用しうるかを、理論に基づいて具体的に検証する。第5章では良き「第三の場」を包摂するフィンランドの公共図書館の現況と理念について確認し、これからの日本の図書館はどうあるべきかについて示唆を得たい。

1. 場としての図書館 (library as place)

まず、1990年代アメリカを中心に始まった「場としての図書館」の研究方法・視点、そして「場」の捉え方について端的に解説しておきたい。

1.1. 「場としての図書館」 (library as place) の研究方法・視点

人文・社会科学分野における旧来の伝統的研究は、「歴史」(時間)を重視し、「場所」(空間)を看過してきたことは否めないだろう。しかし、1970年代に至ってフランスの哲学者ミシェル・フーコー、同じく哲学者のアンリ・ルフェーブ、カナダの地理学者エドワード・レルフなどによって、「場所」(空間)を扱う地理学が大きな躍進を見せることとなった。レルフによると、場所は、人間の生活や存在を根底で支える重要なものであり、また、人々の生活や多様な活動で満たされた「現象」なのである²⁾。そして、現在に至り、人々の豊かな社会生活を支える場所の衰退や「場所感」の喪失という危機的状況の中、多くの学術分野において、「場所」(空間)は重要な研究テーマおよび研究方法となっている。

「場としての図書館」を牽引するウェイン・ウィーガンドは、「場所」(空間)を新たな研究課題とすることで、「利用者の生活の中における図書館」(the library in the life of the user)という広い観点からの考察が求められ、従来の図書館情報学の伝統的な専門領域を超えた幅広い研究が行われることになると論じた³⁾。つまり、新たな「場としての図書館」研究では、利用者の館内だけの活動から、館外も含めた住民の「日常生活」へと大きく視野が拡がり、利用者が属する社会やコミュニティ、文化、時代環境までを含むより俯瞰的な広い視野から、図書館の公共空間、生活空間のもつ意味や価値を考察することになるのである。

そして、伝統的な図書館研究が基本的に建築家・管理者側、つまり上からの視点をとっていたのに対して、「場としての図書館」研究は、その反対側の生活主体としての利用者の側、つまり下からの批判的な視点をとることになる。そして、図書館側からの考察だけではなく、その場所にいる多様な利用者(および職員)の感覚・感情、そして様々な生活行動や知的・社会的活動をフィールドワーク等の調査によって実態的に捉え、その場所・空間が、利用者(および職員)によって多様に、主体的に、暫時的に機能、変化、再構築されていることを明らかにしようとするのである。

1.2. 「場」(place) という概念 — 「場」の創造性、多元性、インタラクティブ性

アメリカを中心に始まった「場としての図書館」(library as place) 研究における“place”に対する日本語訳として、物理的な「場所」ではなく、より人間的、社会的な「場」という語がふさわしいと筆者は考える。哲学者山脇直司によると、古代ギリシャのすぐれた民主政指導者ペリクレスは、「アテナイとは、城壁やその他の土木施設ではなく、アテナイのことである」と語り、まさに物理的な場所よりも「人的共同体」が民主的な場所・空間を作っていることを指摘した⁴⁾。同様に、図書館という民主的な場所・空間も、建物や設備が主体ではなく、まさにそこに集う人々が創り上げ、発展させていると考えられ得るのである。

そして、日本の場／場所論の先行研究によると、「場」は、物理的な「場所」と比べ、人びとの関係性や日常生活の多様な活動を含みうる包括的でインタラクティブな概念とされている。例えば、岩崎正弥らは「〈開かれ、生みだし、包み込む〉という特質をもつ空間が『場』である」と定義している⁵⁾。清水博は、日本の文化は場の文化であり、その最高の形態は開かれた「出会いの場」における「共創（共同による創造）」であると論じている⁶⁾。

つまり、人々の多様な活動が「場」を創出するとともに、「場」も人々の活動や関係性に影響を与えるのである。「場」としての学校図書館について優れた考察をしたアドリアナ・エスティルも、「図書館という場が、利用する登場人物によって活かされ、社会的に生産されるとともに、登場人物の実践に支配的な影響を与えている」と指摘している⁷⁾。すなわち、「場」は物理的、固定的な場所ではなく、その土台の上に、多様な利用者たち自身によって多元的、複層的、暫時的に創造されるものであり、利用者の多様な生活行動や知的活動や関係性を包摂し、それらをさらにインタラクティブに発展させるような現象を意味するのである。

1.3. 多様な「場」を包摂する「エテロトピ」としての図書館

利用者側の視点から図書館という場を考察すると、図書館管理者や研究者が想定した理想的な空間や活動さえも、その利用者が紡ぐありふれた日常生活行動や感覚・感情によって多様に変化しうるということが認められるだろう。例えば、図書館は、誰もが利用できる開放的な交流と学びの空間でありながら、ある利用者にとっては、他人からの逃避の場所（アジール）ともなりうるし、単なる無為の昼寝の場所ともなりうるのである。前掲の哲学者ミシェル・フーコーは、まさに図書館は「エテロトピ（混在郷）」に他ならないと述べている。フーコーによると、図書館は「単一の現実の場所にいくつかの空間—それら自体においては相容れないいくつかの場—を並列させることができる」特別な場所なのである⁸⁾。すなわち、図書館は、「勉強」や「遊び」、「無為」や「創造」、「孤独」や「交流」、「静寂」や「喧騒」など、相反する様々な活動やニーズを受け入れ、そこから創出される実に多様な場（空間）と機能を多元的、相互作用的に包摂できる特別な「エテロトピ」なのである。

すなわち、実証的、批判的な「場としての図書館」研究は、図書館における多元的な「場」が、利用者（および職員）によって多様に、主体的に、暫時的に機能、変化、再構築されていることを明らかにすることで、動的でインタラクティブな場としての図書館、「エテロトピ」としての図書館を文化政治学的に解明することを目指している。そして、図書館はデジタル・ライブラリーや電子書籍に簡単に置き換えられるような単なる本や情報資源の集積体ではなく、住民のアクチュアルな日常生活と学びを支え、より豊かなものとし、知的出会いと社会的交流を促し、コミュニティの文化、歴史、つながりを保持し、創出するリアルな場であり、物理的な場所を基盤とした多様な社会・文化的機能と価値をもつということを主張するのである。

2. 「出会いの場」としての図書館

2.1. 「出会いの場」「交流の場」と図書館の役割

政治哲学者ハーバーマスは18世紀のヨーロッパ市民社会を成立させた教養ある市民の政治的熟議の場である「公共圏」が19世紀の福祉国家化のもとで衰退していったことを指摘した。そして驚くことに、20世紀に至ってからは、さらに気軽な庶民の交流の場やたまり場すら、世界中の街角から急速に消滅しつつある。アメリカの社会学者オールデンバーグは、すでに30年前にそうした地域住民の身近な社交の場を「第三の場」と名付け、その草の根民主主義の具現化をはじめとする多くの重要な機能とそうした場の復興を強く説いた⁹⁾。しかし、今やアメリカのみならず、世界中の都市において、伝統的な住民の交流の場であった広場、公園、教会、郵便局、床屋、コーヒーショップ、パブ、そして井戸端や歩道から、かつての活気や人々の賑わいがほぼ消え去ってしまっている。また、住民が気軽に集まれる場所の消滅だけでなく、さらにテレビやインターネットの普及、住宅の郊外化などによって、人々のコミュニティ活動、ボランティア活動などを楽しむ習慣そのものが、衰退の一途を辿り続けたのである。それは、「信頼に基づく人と人とのつながり」（＝「社会関係資本」）の急激な希薄化までもたらすこととなった。1970年代から始まったその危機的なアメリカの状況を、社会学者ロバート・パットナムが、膨大な実証的データによって明らかにし、その著書『孤独なボーリング』¹⁰⁾（2000）で世界に警鐘を鳴らしたことはまだ記憶に新しい。

このように公共空間やコミュニティの衰退、社会的ネットワークの希薄化が広く叫ばれている危機的現況の中で、あらゆる人々がいつでも自由に利用できる身近な公共施設であり、包容力ある「エテロトピ」である図書館が果たすべき役割は自ずと明白であろう。それは、図書館のコレクションと空間と機能とを上手く活用し、住民の「交流の場」、対面的な「出会いの場」、対話と議論の場、生の情報交換の場、地域の文化と情報の場を創出するとともに、「社会関係資本」を創出・蓄積し、地域のコミュニティを再生・創出することである。

2.2. 「出会いの場」「交流の場」を図書館が創出・包摂する意義

しかしながら、近年の日本の図書館は、あまりにも教育や黙読や研究に重点を置きすぎてきた。したがって、図書館における「出会いの場」「交流の場」の創出に、大きな違和感を感じたり、異を唱えたりする人々も多いだろう。しかし、図書館における「出会いの場」「交流の場」の創出の目的と意義は、図書館の公共性と「エテロトピ」性にもとづく単純な地域活性化やコミュニティ創出の社会貢献にとどまらないのである。その共通理解をまずここで図らねばなるまい。そこで、以下に単なる地域活性化を超える重要な3つの目的について解説していく。

2.2.1. 社会関係資本の創出・蓄積と図書館の本来の役割・機能の発揮

まず第一に共通理解しておきたいことは、図書館が住民の出会いと交流を促進することの大きな目的は、基本的な図書館本来の役割と機能—情報の収集・保存・提供機能や生涯学習支援機能、地域の文化・情報拠点としての機能と役割—が十全に発揮されるための基盤をつくることにある。つまり、

「出会いの場」「交流の場」の創出は、「社会関係資本」を創出・蓄積し、図書館機能の土台を固めるための重要な図書館の責務なのである。

パットナムの社会関係資本論に従うと、「信頼に基づく人と人とのつながり」(=「社会関係資本」)が減少すれば、個人の活動や生活から豊かさや多様性がなくなるとともに、国や地域社会も衰退してしまう。すなわち、政治、文化、経済、社会、福祉、教育、地域の近隣関係、民主主義、さらには個人の生涯学習、健康や幸福までもが「社会関係資本」に依存しているのである¹¹⁾。したがって、「社会関係資本」が減少すれば、住民や地域コミュニティの健全性が損なわれ、それらに支えられている図書館も衰退し、十分に機能できなくなってしまうことになる。図書館における「出会いの場」「交流の場」の積極的な創出は、個人やコミュニティにおける「社会関係資本」の創出と蓄積をもたらし、個人と社会を豊かに健全にする。そして、図書館の本来の使命と役割が、活気ある地域コミュニティの中で十分発揮され、図書館が多くの健全なる市民に支持され、より多く、より良く利用されるようになるのである。図書館における「出会いの場」「交流の場」の積極的な創出は、社会や個人にとって大切な「社会関係資本」を創出、蓄積し、さらに図書館の本来の使命と役割の十分な発揮とさらなる図書館の発展を図るために必要不可欠なことなのである。

2.2.2. 魅力ある公共の場―「屋根のある広場」に生まれ変わる

2つ目の重要な目的と意義は、様々な人々との「出会い」や「交流」を創出することで、利用者の心理的満足や期待をさらに高め、図書館をより楽しい魅力的な公共の場にするということである。社会学者の稲葉振一郎は、市民社会を維持する場・空間には、人と人との「つながりの快楽」が得られることが必須要件だと論じている¹²⁾。つまり、市民社会における公共の場は人との交流それ自体を目的化した場であり、人とのコミュニケーションが楽しめる場でなくてはならないのである。従来の伝統的な公共の場であった「広場」も多様な人々の出会いと交流の場として機能し、「つながりの快楽」が期待され、十分な満足が得られる場であった。図書館も情報と文化の公共的「広場」であるなら、そこには当然、人と人との「つながりの快楽」がなくてはならないのである。

また、イタリアの図書館研究者アントネッラ・アンニョリも、民主主義の原動力であった「広場」をはじめとする公共空間が衰退している危機的現況において、図書館がその危機から逃れるためには新たな取り組みをする必要があると述べている。「つまり、出会いの場へと、大人から子ども、裕福な人から貧しい人、ジプシーから枢機卿までに利用される『屋根のある広場』へと生まれ変わるのである¹³⁾」。

図書館が、多様な人々が自由に集える「屋根のある広場」であり、現代の市民社会を支える公共の場所・空間である限り、「つながりの快楽」のある「出会いの場」「交流の場」の創出および包摂を積極的に図ることは、まさに当然かつ必要なこととなるだろう。それは、また、これからの社会における図書館の維持存続と発展を左右する重要な課題でもあり、より良き社会の実現にもつながるのである。

2.2.3. 多様な出会いと情報の場

この高度情報化社会、デジタル社会において、インターネットは無限に多様性のある情報の場と通常認識されている。しかし、アメリカの政治学者キャス・サンスティーンが、その著『インターネットは民主主義の敵か』で指摘したように、インターネット検索では自分の関心ある狭い分野や思想の情報ばかりにアクセスすることになり、かえって多様な情報や人々と出会う機会がなくなってしまうのである。それによって、個人の視野や関心が狭窄し、多様な情報の不足とも相俟って、健全な市民としての適切な思考と判断が阻害され、ついには民主主義の危機を引き起こす可能性までであるとサンスティーンは警鐘を鳴らす¹⁴⁾。

一方、ノルウェーの図書館学研究者スヴァンヒルド・アバボとラグナー・オーダンソンは、「場所としての公立図書館」プロジェクトにおいて、図書館内の利用者の多様な活動を現地調査によって把握、検証し、図書館は“low intensive meeting place”（集中的でない出会いの場）であると結論付けた¹⁵⁾。すなわち、図書館は、趣味も関心も、文化的・民族的背景も生活環境もまったく異なる普段出会えない様々な人々や、思いがけない情報や多様な知識、周辺の文化とも出会える貴重な場として機能しているということである¹⁶⁾。こうした多様な「出会いの場」は、特に多民族国家や移民社会、格差社会には不可欠であり、社会の分断を防ぎ、寛容な多様性ある社会、より良き公正な市民社会を作り出す上で重要な役割を果たす。多様性との「出会いの場」、そしてそれがもたらす他者理解と自己理解は、実はインターネットの世界にあるのではなく、地域の身近な図書館という場の中にこそ存在するのである。図書館はそうした貴重な場としての価値と役割を認識し、現代の高度情報社会、グローバル社会、多文化社会、そして生涯学習社会の中で、さらにその充実と発展を図っていかねばならないのである。

3. 「第三の場」 (third places)

図書館が、屋根のある公共の「広場」として、地域の多様な人々の「出会い」と「交流」を促進し、「社会関係資本」の創出と蓄積を積極的に図るために大きなヒントを与えてくれるのが、上記のオールデンバーグが提唱した「第三の場」(third places)の概念である。日本でも2013年、「サードプレイス」という名称で翻訳書が刊行され¹⁷⁾、一般的にもその名が普及し始めているが、筆者はすでに2008年に「第三の場」として初めてこの概念を日本の図書館界に紹介している¹⁸⁾。この訳語にこだわる理由は、オールデンバーグが軽い語感の「居場所」や「たまり場」というような言葉を避けて、「第三の場」という学術用語を創案したことを鑑みて、日本語の「サードプレイス」では学術用語として軽すぎると筆者が判断したからである。そして、アンソニー・ギデンズの「第三の道」に習って「第三の場」と訳出した。したがって、本稿では、訳語として「第三の場」を採用する。

3.1. 良き「第三の場」 (third places) の特徴

オールデンバーグは、「第三の場」を「堅苦しくない公共的な集まりの場」(informal public gathering places)であり、住民がいつでも誰でも自由に出入りでき、おもしろく陽気に会話を楽し

める場所であると定義した。都市生活者には家庭（第一の場）や仕事場（第二の場）の他に、魅力ある「第三の場」で過ごすことが必要なのである。それは、比類なき独自の価値と存在意義をもち、コミュニティや個人に大きな利益と効用をもたらすと論じた¹⁹⁾。現在、「第三の場」は社会関係資本を効果的に創出する場として、広く注目を集めている。まず、彼の言葉を引用しながら、成功した「第三の場」に共通する8つの特徴を端的に紹介する²⁰⁾。

〈成功した「第三の場」(third places)の8つの特徴〉²¹⁾

- ① 誰でも「思いのまま出入りでき」、誰も「もてなし役を要求されず」、全員が「くつろぎ、心地よく感じる」中立地帯にある。
- ② 「一般住民がアクセス可能」で、「形式張った会員資格や排除の基準を設定しない」平等主義にして包み込む場である。
- ③ 「会話」を「主要な活動」とする。オールデンバーグが説明するように、「第三の場」を最も明示する特徴は、話が楽しいとか、活気があり、生気に満ち、華やかで魅力的ということである。
- ④ 「アクセスしやすく」、協調的である。最良の「第三の場」とは、ほとんどいつでも1人で行けるし、知り合いが見つかる確信できる場をいう。
- ⑤ 「常連」や「客仲間」がおり、新参者と信頼を育くみながら、その場でくつろぎ、「陽気な雰囲気」をつくる。
- ⑥ 建物は目立たない。「概して簡素で」、印象に残らない外観をしている。そうした建物は「集まる人の気取りの除去に役立ち」、その利用者の日常にとけ込ませる。
- ⑦ 陽気な、「遊び場的な雰囲気」を持続している。
- ⑧ 家を離れた時の「もう一つの家」である。家とは根本的に違う設定だが、第三の場は、「心理的な快適さや支援を与える」という点で、良い家庭と極めて似ている。

3.2. 良き「第三の場」(third places)の9つ目の特徴

良き「第三の場」の8つの特徴には書かれていないが、「第三の場」が機能する大事な前提ともなっているのが、その場を取り仕切る「世話人」(public characters)の存在である。オールデンバーグによると、良き「第三の場」には必ず「世話人」、つまりオーナーや従業員がおり、来客者を歓待し、その場の安全と秩序を守り、居心地良さを保っている。また、「世話人」は、近隣のあらゆる出来事や人々を知っており、人と人とを結びつけ、地域の出来事や課題についての議論を促すファシリテーターともなる²²⁾。もし知的な「世話人」がいれば、その場が十分「公共圏」として機能しうるので、重要な存在である。したがって、本研究では、その場の安全性と快適性を守り、利用者から信頼される「世話人」が存在することを、良き「第三の場」の9つ目の特徴として新たに加えたい。

4. 良き「第三の場」(third places)の特徴とフィンランドの図書館

これまでの研究は、このように良き「第三の場」の8つの特徴を図書館という場所全体にあてはめようとしてきた²³⁾のだが、筆者は、「第三の場」を多元的な一つの場（空間）と捉えることが必要で

あると論じ、日本のある学校図書館について「第三の場」を適用し成功した²⁴⁾。そして、今回は図書館先進国であるフィンランドの公共図書館について、「第三の場」を適用しうるかを、利用者が創出する多元的な場・空間に着目し、検証してみたい。筆者は2015年9月に約1週間フィンランドに滞在し、公共図書館を視察し、司書や利用者に話を聞くとともに、長時間自然参与観察をおこなった。

4.1. Sello Library

Sello図書館は、ヘルシンキ市近郊のエスプー市の大きな駅に隣接する大型ショッピングモールに位置している。買い物や通勤のついでに気軽に④「アクセスしやすい」大変便利な立地にある。ガラス張りの大きな独立した建物だが、モールに溶け込んでおり、買い物のついでに気楽に入館できる。間違いなく、⑥「建物は目立たず利用者の日常にとけ込んでいる」。

入り口のドアには、ポスターが貼られてあり、フィンランド語、スウェーデン語、英語の3ヶ国語で次のように書かれていた。

図書館へようこそ！

あらゆるサイズ

あらゆる肌の色

あらゆる年齢

あらゆる性別

あらゆる考え

あらゆる宗教

あらゆるタイプ

あらゆる人々

ここは安全です！

このポスターは、この図書館が、あらゆる人たちを受け入れ、皆が安全、安心に過ごせる公共の「広場」、すなわち、①「誰もが自由に出入りできる中立地帯」で②「一般住民を平等に包み込む場」であることを示している。ロビーは、高い吹き抜けの明るく広い気持ちの良い空間になっていて、PCを使って作業をしている人、本を読んでいる利用者、丸テーブルを囲んで③「会話」をしている男女の若者たち、知り合いと立ち話をしている利用者などでフロアは埋まっていた。また、ロビー右手には、ピアノや音響設備、ステージが敷設されており、コンサート、ダンス、講演会、ショーなど、司書と利用者とは共同で様々なイベントを実施し、エンターテインメントや⑦「遊び」の機会が頻繁に創出されている。左手にはカフェもあり、多くの人々が③「会話」を交わしている。まさに、様々な人々が行き交い、様々な活動がおこなわれる「屋根のある広場」になっていた。しかし、たんなる広場ではなく、図書の展示と、カウンターで多くの利用者に対応し、場を取り仕切っている司書たち（⑨「世話人」）の存在が、ここがまさに安全な図書館に他ならないことを示していた。

ロビーの右手にはヤングアダルト(YA)コーナーがある(写真1)。チェス、ビリヤード、ボードゲーム、テレビゲーム、ビデオ、パソコン、テレビ、マンガ、雑誌、小説などが置かれ、中高校生のたまり場、⑦「遊び」場となっている。テーブルでおしゃべりしたり、お菓子を食べながらビデオを見たり、サッカーのテレビゲームに興じていたり、大きなソファに寝そべっていたり、



写真1. Sello Libraryのヤングアダルトコーナー

ビリヤードをする二人の少年、チェスの相手を待つ高齢男性、談笑する少年たち、友だちを待っている少女などの姿が見られる。

自由気ままに楽しく過ごしている中高生たちの姿が見られ、皆、まさに⑧「家」のようにくつろいでいた。YA担当の司書は⑤「常連」利用者にとにぎやかな挨拶を交わしていたし、おそらく初めて来た若者は友だちと好奇心いっぱいの目をしてあたりを見回し、その後空いていた席を陣取っておしゃべりを始めた。大人も中を自由に行き来し、隅の椅子に座りじっと若者の様子を眺めている高齢者も見受けられた。街中のゲームセンターとは違って、清潔で、明るく、⑦「陽気な」雰囲気があり、大人の監視の目が行き届いた、まさに中高校生の健全な⑦「遊び」場、居場所となっていた。ここでは、いわゆる勉強机すらも置かれておらず(静かに勉強、研究、読書をしたい人のためにサイレント・ルームやリーディング・ルームが上階にある)、友人同士のグループ学習や遊びと③「会話が主要な活動」となっていた。

4.2. Pasila Library

Pasila図書館は、現在ヘルシンキ市内で一番大きい図書館である。ヘルシンキ中央駅からほど近いPasila駅前の中低層集合住宅やオフィスビルが並ぶ地域の一角にあり、①「個人が自由に出入りでき」、④「アクセス」は大変良いが、入口は注意しないと見過ごしてしまうほどまったく⑥「目立たない」。しかし、中に入ると様相が一変する。真っ白な内装に青空が映える高い吹き抜けホールの下、大きな泉(噴水機能付き)が目の前に現れるのである(写真2)。コンクリートの建物ばかりのこの地域に、まるでテレビの泉が出現したかのような感動と清涼感がもたらされている。住民はここに来るだけで、素晴らしい気分転換になるだろう。実際に利用者はほとんどこの泉の周りを中心に座っていた。図書館によると、この泉は「知識の泉」を象徴しているということだが、場にもたらされる効果はそれ以上に絶大である。前掲のイタ

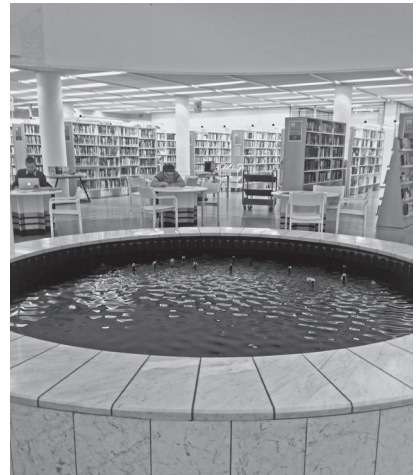


写真2. Pasila Library

この図書館の閲覧室の中央には、満々と水を湛えた大きな泉がある。泉の周りは利用者の人気席で、空席がない時は直接泉の横に座りこむ利用者もいるほどである。

リア人のアンニョリは噴水のない「広場」は想像できないと述べている。古代ローマのみならず「噴水は、今日でも市民から喜ばれる出会いの場である」のだ²⁵⁾。すなわち、この図書館はまさに「噴水（泉）」によって、魅力ある「広場」、つまり、「市民から喜ばれる出会いの場」を演出しているのである。そして、あらゆる人々に開かれ、①「誰もが自由に出入りできる中立地帯」で②「一般住民を平等に包み込む場」となっていた。

北欧の図書館では移民の語学学習と生活支援ための「ランゲージカフェ」が盛んに開かれている。この図書館でも泉の近くのフロアの片隅で、15人ほどの移民や地元市民が集まり、にぎやかにコーヒーやお菓子を食べながらフィンランド語で会話をしていた（写真3）。先生はおらず、地元市民の男性がボランティアでオーガナイザーをしていた。いつも彼が場所を予約し、茶菓子を用意するそうであるが、彼自身が移民で苦労したので、今こうした活動をしているとのことだった。⑨司書も「世話人」としてコーヒーやお茶を用意したり、席をつくったり、必要な情報や資料を提供したり、様々な支援をしていた。性別も年齢も異なる参加者全員が対等の立場で、自由に、様々なトピックで、実に楽しそうに③「会話」をしており、いつもあっという間に4、5時間経ってしまう



写真3. Pasila Libraryのランゲージ・カフェの様子
移民や地元住民がフィンランド語で自由に談笑しあう。テーブルの上にはコーヒーやお菓子の他に分厚い辞書や本が置かれていた。

そうである。図書館だからこそ時間を気にせず楽しめるのであろう。また、書架が程よい仕切りになっているのか、うるさく感じられなかった。⑧「家」の居間にいるようにくつろいで、時間を忘れるほど楽しく会話することや「つながりの快楽」を享受することが遊びにつながるとしたら、まさに、ここには⑤「常連」による楽しい⑦「遊び」の場が創出されていた。

4.3. Library 10

Library 10は、音楽メディアに特化した新しい図書館として近年開館し、世界中の注目を浴びた。当図書館は、ヘルシンキ中央駅の目の前に立つ中央郵便局の2階の一隅に位置し、④「アクセス」が大変良く、①「誰もが自由に出入り」できる。しかし、入口は注意しないと見過ごしてしまうほどまったく⑥「目立たず」、ワンフロアだけの比較的小規模な図書館である。

館内のカウンターでは、若い利用者に合わせてピアスやタトゥーをした職員も見受けられた（写真4）。読書をしない音楽愛好家の若い利用者たちが、怖気づかずに、親しみを持って受け入れられるような雰囲気カウンターに醸し出されていた。職員たちに直接話をしてみると、外見によらず優しく親切丁寧で、音楽メディアや音響関係の専門知識や技能も身につけている優秀な司書やメディアワーカー（⑨「世話人」）たちであった。いくら高価な音楽機材があっても、CDがたくさん揃っていても、それを管理運営し、利用者となげける親切で優秀な司書やメディアワーカーがいなくては、利用者を本当に満足させることはできないのである。

Library 10は音楽メディアに特化した図書館であるとともに、ヘルシンキのパイロット図書館で、様々な新しい先進的な取り組みを試験的におこなっている。館長のピルヨ・リパステイ (Pirjo Lipasti) 氏によると、利用者のニーズを常に敏感に察知し、毎日何かしら変化していると言う。図書館は狭い限られたスペースにも関わらず、音楽メディア関係の資料やステージ、スタジオ、設備、機材を揃えるだけでなく、児童コーナー、オフィス・スペース、PCコーナー、雑誌・新聞閲覧スペースもある。最近では、3Dプリンターやミシンなどを置いた「メーカースペース」(創作空間)や、利用者のニーズに応じて、瞑想やヨガもできそうな独特な雰囲気の「サイレント・スペース」も作られた。また、予想外にニーズが多く急速に数が増加しているという図書資料が狭い館内に入り切らず、館外にまで並べられていた。



写真4. Library10の司書たち
Library10の司書たちは、若い利用者に合わせたラフな格好と親しみやすい笑顔、豊富な専門知識で、若い利用者を引き付けている。

利用者は自由に椅子やテーブルを動かして、自分のスペースを作ってPC作業や読書をしていた。中にはテーブル全体に飲み物や食べ物を並べ、まるで自分の家の食堂のようにゆったり食事をしている利用者もいたし、囲いのあるモダンチェアを壁側に向けて赤ちゃんに授乳をする母親も見受けられ、安心安全な⑧「家」のような空間が創出されていた。また、ヘルシンキ中央駅が目前なので、館内を歩き回る通勤者や旅行客らしき利用者も数多くいた。簡単な囲いのあるデスクと椅子だけの小さな個人オフィス・スペースで、仕事の電話やPC作業をしている利用者もいた。音楽スタジオやミーティングルームはひっきりなしに利用され、ピアノや大型スクリーンもあるステージでは頻繁に発表会やDJ、コンサート、講演会などが行われているようだ。ここは、まさに、②「一般住民を平等に包み込む場」であり、④「常連」がおり、③「会話」が行われ、音楽創作・発表やモノ作りの⑦「遊び」があり、館内が③「活気があり、生気に満ち、華やかで魅力的」であった。朝8時から夜10時まで開館し、1日に2000人もの人々が訪れるこの図書館は、「第三の場」だけでなく、さらにもっと多様な場・空間を包摂する「エテロトピ」を実際に体现したような図書館である。

5. 考察

以上の照合結果から、上掲のフィンランドの図書館3館は「第三の場」の9つの特徴をすべて満たしており、「第三の場」の空間が創出され、多元的に包摂されていると考えられる。また、今回検証した3館だけでなく、フィンランドのその他の図書館においても「第三の場」が創出、包摂されていると思われる。つまり、フィンランドでは、図書館が良き「出会いの場」「交流の場」、魅力的な公共の「屋根のある広場」となっているということである。実際に、図書館は、地域で常にもっとも人気のある「出会いの場」「集会の場」であり、年間のべ5000万人(年間一人あたり9.3回)が図書館を訪れている。また、フィンランドは人口が545万人だが、年間総貸出冊数9100万冊、年間一人あたり

の貸出冊数16.8冊（日本の約4倍）、291の自治体が図書館を有し、そのほとんどが分館（465館）と自動車文庫142台をもっているという図書館先進国である。

ヘルシンキ市図書館の館長であるトゥーラ・ハヴィスト（Tuula Haavisto）氏によると、フィンランドの公共図書館利用率が高い理由について、(1) 読書や知識を重んじる国の伝統があること、(2) 環境に応じて変化する能力を図書館が有していること、(3) 図書館がアクセスしやすい場所にあり、質の高いサービスを提供していること、そして(4) おそらく学校図書館がなかったため子どもの頃から公共図書館利用が習慣化したことを挙げている²⁶⁾。しかし、(4) については、学校図書館と公共図書館は連携しあうべきであるし、これからフィンランドは学校図書館が整備されていく方向にあるので、適切な理由とは言い難い。その代わりに(4)の理由を「図書館が良き『第三の場』として、人との交流や出会いのある魅力ある公共の広場となっていること」とすべきだと筆者は考える。また、それは、人々を魅きつけ、図書館が活用されるだけではなく、図書館の価値や役割にも関わる重大なこととなる。第2章で述べたように、図書館が良き「第三の場」として機能すれば、地域活性化やコミュニティ創出に大きく貢献するとともに、社会関係資本を創出し、政治、文化、経済、社会、福祉、教育、地域の近隣関係、民主主義、そして図書館それ自身をより良く機能させ、さらには個人の生涯学習、健康や生活までもが豊かに充実するのである。またさらに、図書館が、人とのつながりと会話のある公共空間として、現代市民社会や民主主義社会を支えること、そして、多様性との「出会いの場」として、高度情報社会、グローバル社会、多文化社会、生涯学習社会に貢献することを可能にするのである。

そして、実際に、フィンランドは社会関係資本が豊かであると言われており、2000年代を通して、OECDの学習到達度調査（PISA調査）、世界のイノベーション指数（INSEAD調査）、国際競争力ランキング（世界経済フォーラム2011年）、国内総生産（GDP）などで世界トップクラスに位置し、教育、経済、政治、福祉などあらゆる面で大きな成功を収めている。それを、一概に図書館が作り出したとは言えないにしても、実際に、フィンランドの図書館が社会や住民から高く評価され、活発に利用されていることは間違いなく、フィンランドの成功の基盤となっていることは否めないだろう。

ヘルシンキ市図書館の2018年のビジョンは「図書館は、アイデアと思考を豊かにし、さらに知識と技術と物語を共有することによって、みなと一緒に新しい市民社会を作り出していく場である」²⁷⁾ というものである。これは、まさに1.2で紹介した清水が論じている「場」の最高形態を言い表しているのではないだろうか。すなわち、「開かれた『出会いの場』における『共創（共同による創造）』」である。これからの日本社会における場としての図書館の役割と使命を考える上で、良き「第三の場」を包摂し、それを土台に場の最高形態＝「共創」の場を作り出そうとしているフィンランドの図書館の高い理念と先進的な取組は大いに参考にされるべきだろう。

（この研究は科研費助成事業平成26年度～28年度「基盤研究（C）」「『場としての図書館』の統合的研究：日本の新しい21世紀型図書館パラダイムの提唱」の助成金の交付を受けて実施された。）

注

- 1) 川崎良孝・吉田右子『新たな図書館・図書館史研究：批判的図書館史研究を中心として』京都図書館情報学研究会, 2011.
- 2) エドワード・レルフ『場所の現象学—没場所性を越えて』高野岳彦ほか訳, 筑摩書房, 1991.
- 3) Wayne A. Wiegand, "To Reposition a Research Agenda: What American Studies Can Teach the LIS Community About the Library in the Life of the User," *Library Quarterly*, vol. 73, no. 4, October 2003, pp. 369-382.
- 4) 山脇直司『公共哲学とは何か』筑摩書房, 2004, p.50.
- 5) 岩崎は場について次のように述べている。

場とは本来、さまざまな異なる人々に開放され、だから多様な人々が集まり、交わり、活動を生みだし、共に活動する場所を指す。私が「場所」ではなくあえて「場」という言葉を用いるのは、このような原義をふまえて、以下の視点を導入したいからだ。

 - (1) 開かれていること（閉鎖性を土台としない）
 - (2) 生み出すこと（静的ではなく、活動を生成するという意味で動態的である）
 - (3) 包み込むこと（土地が太陽を受け入れるように、異なるものもことなるものとして受容する）

（岩崎正弥・高野孝子『場の教育』農文協, 2010, pp. 28-29）.
- 6) 清水博『場の思想』東京大学出版会, 2003.
- 7) グロリア・J. レッキーら「スペース、場、図書館：序」『場としての図書館』川崎良孝・久野和子・村上加代子訳、京都大学図書館情報学研究会発行、日本図書館協会発売、2008, p.34.
- 8) ミシェル・フーコー「他者の場所：混在郷について」工藤晋訳『ミシェル・フーコー思考集成X：1984-88 倫理／道徳／啓蒙』小林康夫ほか編、筑摩書房, 2002, p. 25.
- 9) Ray Oldenburg, *The Great Good Place: Cafes, Coffee Shops, Bookstores, Bars, Hair Salons, and other Hangouts at the Heart of a Community*, New York, Marlowe & Company, 1989 [レイ・オルデンバーグ『サードプレイス：コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』忠平美幸訳、みすず書房, 2013].
- 10) Robert Putnam, *Bowling Alone: the Collapse and Revival of American Community*, Simon & Schuster, 2000 [ロバート・パットナム『孤独なボウリング：米国コミュニティの崩壊と再生』柴内康文訳、柏書房, 2006, 689p.].
- 11) 同上.
- 12) 稲葉振一郎『「公共性」論』NTT 出版, 2008.
- 13) アントネッラ・アンニョリ『知の広場：図書館と自由』みすず書房, 2011, p.92.
- 14) キャス・サンスティーン『インターネットは民主主義の敵か』毎日新聞社, 2003.
- 15) Svanhild Aabo and Ragnar Audunson, "Use of library space and the library as place," *Library and Information Science Research*, no.34, April 2012, p.138-149.
- 16) Ragnar Audunson, "The public library as a meeting-place in a multicultural and digital context: the necessity of low-intensive meeting-places," *Journal of Documentation*, vol.61, no.3, 2005, pp.429-441.
- 17) 前掲書9).
- 18) カレン・E. フィッシャーら「場としてのシアトル公立図書館：中央図書館におけるスペース、コミュニティ、情報の再概念化」『場としての図書館：歴史、コミュニティ、文化』前掲書7), pp.199-237.
- 19) 前掲書9).
- 20) 8つの特徴をまとめるにあたり、次の論文に記述された前掲論文18) のまとめを参考にした。なお、特徴①から⑧の鍵括弧内はオルデンバーグの言葉である。
- 21) オルデンバーグは、地元の堅実な商売をしている小さな自営業の店がもっともこうした8つの特徴を満たす「第三の場」として成功しようとしている。そして、2001年には、新しい本*を出版し、アメリカ各地における地元密着のコーヒーショップや飲食店、書店、ガーデニングストアなど19の実例を紹介している。ただし、公立図書館の事例は残念ながら紹介されていない。*Ray Oldenburg, *Celebrating the Third Place: Inspiring*

- Stories About the “Great Good Places” at the Heart of Our Communities, New York, Marlowe, 2001.
- 22) 前掲書 9) .
- 23) 例えば、以下の文献である。
- ・ フィッシャーほかの前掲論文 18)
 - ・ Robert D. Putnam and Lewis M. Feldstein, Better Together: Restoring the American Community, Simon & Schuster, 2003.
 - ・ Audrone Glosiene, et al., “Library as a Third Place,” Information Sciences (Informacijos Mokslai) , no. 39, 2006, p. 32-52.
 - ・ Svanhild Aabo and Ragnar Audunson, “Use of library space and the library as place,” Library and Information Science Research, no.34, April 2012, pp.138-149.
 - ・ Kirralie Houghton, Marcus Foth and Evonne Miller, “The Continuing Relevance of the Library as a Third Place for Users and Non- Users of IT: The Case of Canada Bay,” Australian Library Journal, vol. 62, no. 1, February 2013, pp. 27-39.
 - ・ Linda R. Most, "The Rural Public Library as Place in North Florida: A Case Study," Electronic Theses, Treatises and Dissertations, Paper 2226, The Florida State University DigiNole Commons, 2009.
< <http://diginole.lib.fsu.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=4018&context=etd> > [Accessed: 2015/11/30].
- 24) 久野和子「『第三の場』としての学校図書館」『図書館界』63 巻 4 号, 2011, pp.296-313.
- 25) 前掲書 13), p.103.
- 26) Tuula Haavisto, Finnish Public Libraries towards the Future, PDF, 2015. (2015 年 9 月本人より受領)
- 27) 同上 .